遺跡からのメッセージ（20）

イスラエルの遺跡調査 ⑥
シンポジウム「イエス時代のガリラヤ地方と一神教の系譜を探る」

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

公開シンポジウムの開催

2016 年の年の瀬も押し迫った 12 月 17 日（土）、公開シンポジウム「イエス時代のガリラヤ地方と一神教の系譜を探る－イスラエル、テル・レヘシュ遺跡における最初期シナゴーグの発見」が、天理大学を会場に開催された。シンポジウムは、市川裕氏（東京大学大学院教授）を代表とする科研費の研究成果公開・普及事業として実施されたものだ。当日は、シンポジウムの開催を祝福し、日本の調査団の貢献を感謝するルツ・カハノフ駐日イスラエル大使とイツハク・パズ博士（イスラエル考古局）のメッセージも読み上げられた。

最初の基調報告では、橋本英将氏（天理大学文学部准教授）が、「テル・レヘシュにおける初期シナゴーグの発見」と題して、2016 年夏の発掘調査の成果と今後の課題を解説した。2 番目の基調報告、山野貴彦氏（聖公会神学院、日本聖書神学校、農村伝道神学校講師）による「新約聖書時代の初期シナゴーグ」では、シナゴーグとは、もともとギリシャ語で、ヘブライ語ではベト・クネセト（集まる場所）と呼ばれるといった概説のあと、ガリラヤとユダヤにおける初期シナゴーグ（共同体）の登場が、帝政ローマの最初期、第二神殿時代の最終盤に生じたユダヤ教史における重要な現象であることが解説された。同時に、その時代は、ナザレのイエスの登場前夜から新約聖書諸文書の成立の時代（紀元前 4 年頃～紀元後 100 年過ぎ頃）にあたり、イエスが故郷のナザレを訪れた際には、シナゴーグで律法の朗読を行ったあと、述べた言葉が人々に反発を受けたとされるルカ福音書の記述が紹介された。さらに文献に記されたシナゴーグ、碑文資料について触れながら、人々が集まる場、律法の朗読と戒めの教育の場、旅人の宿舎といった初期シナゴーグの機能が考察された。考古学的に初期シナゴーグを認定する条件は、山野氏によれば、①居住地における最大級の建物であること、②人々が座るための段座席（ベンチ）が備えられていること、③建物が宗教的な目的で用いられた痕跡が遺物などから認められること、④傍証としてディアスポラのシナゴーグとの比較、の 4 点だという。以上を踏まえ、テル・レヘシュの新事例の比較材料として、これまでに考古学的に知られている初期シナゴーグの 7 例について、構造や特徴などが具体的に紹介された。

一神教の系譜―ユダヤ教・キリスト教・イスラム教

最後の基調報告、市川裕氏による「一神教の成立とガリラヤ地域」は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三つの一神教の歴史と特徴を俯瞰的に見ることで、キリスト教を軸にした西洋中心の歴史観を問い直し、新たな見取り図を提示するスケールの大きなお話しであった。高校世界史の教科書（山川出版社）では、ユダヤ教は、「ユダヤ人が選民として特別の恩恵を与えられているという選民思想や救世主の出現を待望する信仰」として説明されるが、市川氏によれば、これはキリスト教歴史観が反映された偏った捉え方だ。選民思想はユダヤ人に限られず、神との契約に基づく特別の義務を担うという点も欠落している。そうした観点からは、新しく登場した愛の宗教、キリスト教によって、律法の形式だけを重んじる排他的な宗教に堕したユダヤ教が克服されるという筋書きになる。しかし同じ教科書では、中世のイスラーム世界が適切に描かれ、神の啓示法、つまりイスラーム法（シャリーア）の規範が宗教のみならず、政治、日常生活全般を規定していたことが記される。

教科書では、キリスト教成立以降のユダヤ教に関する記述はなくなり、近代になって再びユダヤ人が歴史の表舞台に唐突に登場する。しかし、実際には、２度の戦争のあと、紀元後 200 年頃、賢者と呼ばれる知識層が口伝トーラーの観念を発展させ、ミシュナ 6 巻の編纂に至る。エルサレムに神殿があった時代には、世襲の司祭（聖職者）が神殿の祭儀、犠牲を司っていたのが、トーラー（律法）の学習と実践をラビ（法学者）が指導する形に変わり、神の啓示（律法）が日常生活全般を規定する律法主義がここに至って確立したのだ。この新しいラビ・ユダヤ教においては、神殿、大祭司、王権、エルサレムを離れた形で、世界中のどこにおいても共同体が成立しうるようになった。そうした共同体の核になったのが、人が集まって神とのつながりを確認する場所になるシナゴーグで、そこでは、奥の幕のうしろ（アーク）に安置された巻物が安息日に取り出され、モーゼ五書＝神の言葉が朗読されるのを、まわりの会衆が聞く。

一神教の系譜を整理し直すと、エルサレム第二神殿時代後期における古代ユダヤ社会の多様な要素の中から、ローマとの二度の戦争を経て、ラビ・ユダヤ教が啓示法の宗教（セム的一神教）として確立し、同じく啓示法の宗教、イスラム教が分岐したのだが、礼拝対象、礼拝内容の点から両者を比較すると、驚くほど似通っている。つまり、ユダヤ教、イスラム教ともに、唯一神が礼拝の対象で、シナゴーグはエルサレム、モスクはメッカの方向を向く。ともに、啓示法（預言書、律法）を学び、神秘的な儀式はない。これに対して、ローマ世界に広がった異邦人キリスト教は、むしろ特殊な一神教で、神の子イエスを礼拝対象とし、神秘的な儀礼として、聖餐（パンと葡萄酒）＝擬似的な生け贄があった。このように、中世の時代、唯一神教には二つの流れがあったのだ。西洋キリスト教（オクシデント）では、ローマ法を継承して、法と宗教が分離されたが、東洋イスラーム（オリエント）の啓示法体制は、法と宗教の一元性を特徴とした。ユダヤ人は両文明圏で異なる生活を体験し、イスラーム統治下では、「啓典の民」として繁栄したが、キリスト教世界では、キリスト殺しの汚名をきせられ、卑しい存在として扱われた。

シンポジウムを通して理解されたのは、テル・レヘシュにおける初期シナゴーグの発見が、エルサレム第二神殿時代のユダヤ社会において、一神教の二つのタイプの源流を考える新たな材料になるということだ。シンポジウムに対する会場からのコメントで、月本昭男氏（上智大学教授）が述べたように、ユダヤ教の歴史におけるガリラヤ地域の再評価もまた、今後の課題となる。